

# 対テロ作員になった私

The Unexpected Spy

「ごく普通の女子学生」がCIAにスカウトされて

トレイシー・ワルダー、ジェシカ・アニャ・ブラウ著

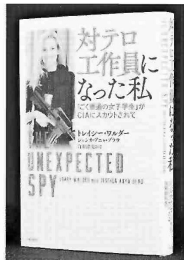
原書房 2640円

評・森本 あんり (神学者  
東京女子大学長)

アメリカの大学生は、「さあ世界を変えよう」と言って卒業する。もちろん戯れ言だが、なかには本気でその気になる若者もいる。

本書は、カリフォルニア育ちのキャピキャピ女子大生が就活でCIA(中央情報局)に拾われ、対テロ作員となって活躍した実話である。冒頭には、本書がCIAの公的な立場と無関係だという「免責条項」があり、内容も検閲済みであると明記されている。カトリック教会で言うImprimatur(出版許可)である。作戦の秘匿性から、〇〇〇と伏せ字になっている部分も多く、いかにも秘密めいていて楽しい。

## 「世界変える」本気の実話



◇Tracy Walder—元CIA特別  
作戦一員、元FBI捜査官  
◇Jessica Anya Blau—作家。

ラングレーで衛星画像の分析官となって一年目、著者は九・一一を経験する。CIAではその瞬間まで、誰一人としてテロの実行を予知していなかったという。昼夜必死に働くチームには、チェイニー副大統領、ライス大統領補佐官、パウエル国防長官といったお馴染みの大物たちが頻りに訪れるようになる。

やがて政府はテロとイラクを結び付けてフセイン政権を転覆させるが、大義名分の大量破壊兵器が存在しないことが判明すると、CIAはまたしても非難の嵐を受ける。著者は、ハワイトハウスが資料を改ざんしたと反論し、ブッシュ大統領を国家反逆罪で弾劾したい、とも書いている。なぜCIAが本書の出版を許可したのか、その理由もこのあたりで見えてくる。

著者はやがてFBI(連邦捜査局)へ転身するが、そこは女性への差別と蔑視が横行するところだった。この現実にはつくづく嫌気がさす。本書には、アメリカが海外でひどく嫌われている、という健康な現実認識も随所に窺える。

スパイ小説好きの方、というより就活でスパイ業界を目指している老若男女にお薦め。作員になるための資格や訓練、銃の扱い方はもちろん、偽装工作や尾行調査、カーチェイスや検問突破の方法、はては海外で同業者に会った時に切るべき仁義まで。白須清美訳。